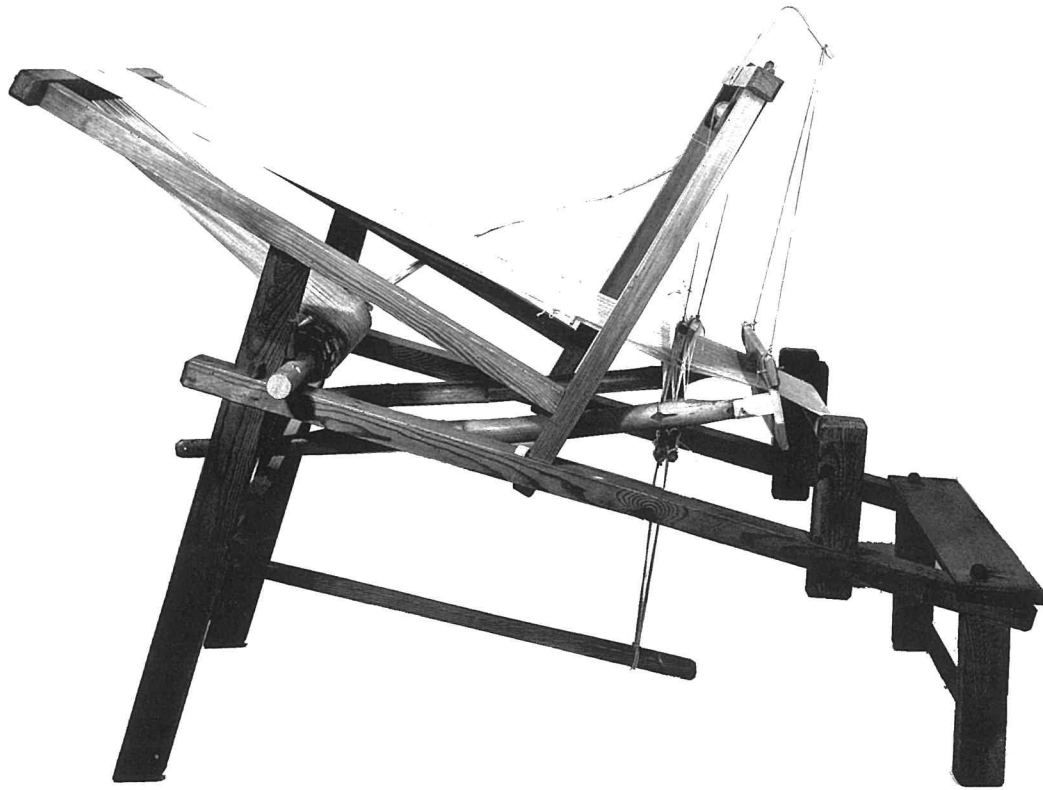


# 民俗博物館だより

Vol. 27 No. 1

2000. 7. 15



▲大和機

## 目次

平成12年度特別展紹介

「奈良晒ならざらし—近世南都を支えた布—」…………… 1

再び、盂蘭盆における客棚習俗について (その一) …………… 4

データベース事始め⑥

新公開用映像資料

「和傘づくり」「提灯づくり」「葛粉づくり」の紹介…………… 6

お知らせ…………… 7

「<sup>な</sup>奈良<sup>ら</sup>晒<sup>ざらし</sup>—近世南都を支えた布—」

横山浩子

奈良晒は、上品の苧麻布に晒しを施したもので、近世初期より奈良の町を中心に生産され、武士の正装である上下（袴）をはじめ、帷子地、幕地などとして用いられました。「麻の最上は南都なり。近国より其品数々出れども染て色よく着て身にまとわず汗をはじく故に世に奈良晒とて重宝するなり」（『日本山海名物図会』宝暦4年）と評され、高級麻織物のブランドとしてその名は全国に知られていました。近世から現代に至る奈良町及びその周辺地域の歴史文化の一端をご紹介します。

## 各展示コーナーと概要

### 1. 上布—麻織物の美—

このコーナーでは、奈良県立美術館所蔵の吉川観方コレクションを中心に江戸期の帷子の優品をご覧ください。

日本の染織文化の担い手は絹といった感があります。しかし、絹織物ほどの華やかな展開はなくても苧麻や大麻を原料とする麻織物の歴史は古く、長い間我が国の庶民衣料を支える重要な位置を占めてきました。木綿が国内生産され、普及するようになると、庶民衣料の基本素材としての地位は次第に木綿と交代することとなりましたが、高温多湿な我が国の夏の衣料素材としては欠かせないものとして引き続き愛用され、特に江戸時代、武家や富裕町人の夏の盛装用の素材としての需要が高まるにつれて、奈良晒、越後上布、薩摩上布、近江上布、能登上布など、各地に高級麻織物の産地が生まれました。

素材を吟味し、丹念な加工をほどこされた上布は、その繊細さ、優美さ、染めや刺繍などの装飾の華やかさに目を奪われます。しかし、そこに息づいている紡織技術の基本は、古来より培われてきたものに相違なく、我が国に連綿と息づいてきた麻織物文化の一つの到達点としてみることができます。

### 2. 奈良晒—南都随一の産業—

奈良晒は、近世各地の高級麻織物産地に先駆け、最も早く生産体制を確立しました。

その始まりは一説に鎌倉時代、南都寺院の

僧尼の衣や袈裟用に、法華寺の尼衆や西大寺周辺の民家の女性達が糸をつくり、織り出したものとも伝えられます（『奈良曝布古今俚諺集』寛延元年）が確かなことはわかりません。中世の奈良は、莊園領主でもあった興福寺、春日社、東大寺などをはじめとする大社寺が林立し、多くの消費者層を抱える都市でした。諸国の物産が流入し、15世紀にははやくも南市に布座や苧座などの存在が確認できます。京都や四天王寺の青苧座を通じて布の原料となる良質の青苧も遠隔の地、越後からすでに入っていたと考えられます。さらに16世紀に入ると、社寺の注文に応じる専門生産者の存在とその傘下での分業体制をうかがわせる史料が散見され、このような歴史的環境が奈良晒生産の基礎を準備したともいえるでしょう。なお、晒業については多聞院日記天正19年の条に、有名な「甚四郎般若寺村サラシャへ聳入了」云々の記事があります。

このような前史をへて、やがて奈良晒の生産がほぼその基盤を固めたといえるのは慶長期前後と考えられています。慶長11年、奈良町総年寄が京都伏見在城の徳川家康に対して晒布20疋を献上、翌年には駿府へ年頭御物礼としての献上が行われ、また、慶長16年に至って家康の上意によって布の長幅丈尺が定められるなど、幕府の御用布として保護統制が加えられるようになったことがその発展の一つの契機となったといわれています。徳川美術館には、家康の遺産として江戸初期の「南都曝」の朱方印のある浴衣が所蔵されています。また、天正期にそれまでの晒法の改良に成功したという清須美源四郎の子孫と伝え、慶長年間より晒蔵方を営み、東武御用御納戸晒の御用を務め、老中の奈良巡見の際は本陣として止宿したといわれる清須美家には当時使われたという御用札などが遺されています。

さて、布の長幅丈尺を定められた奈良晒布は、その布端に「南都改」の朱印を押すこととなり、朱印のない晒の売買は、京都、大阪、堺の三都においても禁止されました。この朱印は、既述の慶長16年、家康の上意を得て当時の奈良奉行大久保石見守が、具足師岩井與

左衛門に命じたのが始まりと伝えられていますが、同18年には晒屋仲間で別の印を押すこととなりました。明暦3年には惣年寄による改印の制度（織初めに極印を、また織留に奈良町年寄の印を押すもので、晒屋はこの印がない布を晒すことを禁じられた。判場は橋本町にあったという）が始まり、後享和2年には奈良晒の長幅が守られていないことに対する処置として、奈良町年寄の判は、晒を行うと消えてしまうので、晒し終えた布に改めて「なら町年寄」と藍印を押すことが定められたといえます（『大阪市史』）。疋田町の前田家に伝わる晒関係文書群の中に、この藍印の見本が遺されています。

今回の展示では、この朱印の遺る江戸時代の火事装束、帷子、袴ほか布地類を公開します。布は染などの加工が施され、一旦着物などに仕立てられてしまうと、その産地を見極めるのはなかなか困難ですが、奈良晒の場合、この印判が一つの手掛かりとなります。

これまで江戸期の奈良晒の遺品は上述の徳川美術館の品を除いて公に知られているものがないだけに貴重です。

奈良晒は17世紀中に急速に発展し、万治元年頃には既に年産30万疋を越え、その後寛文～享保期（17世紀中頃～18世紀前半）には30～40万を越える生産高を示していました。

このような中ではじめは奈良町中心であった生産地域も女性の糸づくりや布織の賃仕事など次第に周辺農村に拡大していきました。江戸中期のものと思われる「奈良晒生平織場所の絵図」（天理大学附属天理図書館所蔵保井文庫）には「奈良・山中在々、南在々、大安寺、郡山辺、蓬来村、疋田村、三条村、西大寺村、法花寺村、秋篠村、中山村、押熊村、

高山村、鹿畑村、山城在々、木津」という地名がみえます。また近頃、山添村春日、春日神社（県指定文化財）の解体修理に際して発見された寛永10年の棟札に「布一端勝原菊」「アサヲ50匁カスガヌシヤノカ、」など布や苧を奉納した10名ほどの名（女性名が殆ど）が記されていました（『奈良県指定文化財平成8年度版』平成10年3月発行）。この人たちが直ちに奈良晒布の生産に携わっていたと断定することはできませんが、興味深い資料です。

このように繁盛した奈良晒もやがて、越後上布、近江上布、能登上布など他国布の市場への進出もあって漸減し、幕末には盛時に比べると十分の一ほどの数万匹にとどまるほどに衰退してゆきました。早期に生産体制を確立し、独占的地位を保っていたために、古い体質が維持され、十分な競争力が備わっていなかったのかもしれませんが、また、40万疋もの生産量といえ、手仕事の時代にあっても良質かつ均質な原料や、技術者の確保などの品質管理の面でもかなり難しいと想像されます。「近年績紡事も甚粗略にして、害多し」（『奈良曝布古今俚諺集』）という粗製乱造があったことも否定できないと思われます。

しかし、一方吉岡幸雄氏所蔵の安政4年の墨書のある奈良晒布は、驚くほどの水準を示す資料です。経緯とも殆ど撚りがなく1cmに経34本／緯49～50本にもなる緻密な布も含まれています。包紙に「大殿様御召料平御帷子晒地切本」とあることから、奈良晒布としても最上級の品であることが察せられ、これを以て俄に当時の一般的な奈良晒布を論ずることはできませんが、少なくとも幕末期であってもこれだけのものを織る技術力はまだあったことを示しています。

これら朱印のある江戸期の奈良晒布については、永年にわたり各地の麻織物及び靱皮繊維織物について調査研究を続けてこられた吉田真一郎氏に多くのご教示を賜り、併せて図録に「奈良と越後縮の糸-原料・苧麻の繊維から見る奈良晒と越後縮-」というテーマで寄稿いただきました。奈良晒研究において今までにない新しい視点からの論考です。

幕末期～明治にかけて、奈良町で「春日藤布」という織物が作られました。椿井町の粕屋與壺郎（松本與壺郎）という人の考案といわれています。明治期に入ってからのもと思われる春日藤の資料については前号の館だよりでご紹介しましたが、その後の調査で保



▲清須美家所蔵の御用札



▲奈良晒布に押された朱印

井文庫（天理大学附属天理図書館所蔵）の奈良晒関係史料の中に考案された当時のオリジナルとみられる布見本があることがわかりました。この場をかりて報告いたします。

### 3. 奈良晒の紡織工程とその技術

#### 一糸作り・織り・晒し

奈良晒は、明治期後半には、原料の入手が困難になったのか、コスト面からか、苧麻から大麻へと原料が変わってゆきますが、苧麻、大麻にかぎらず麻の紡織技術の基本は、毛羽立ちを押さえ、なだめながら絡んだりもつれたりしないように気をつけること、また、糸を撚り合わせてつないでゆくので、撚りがもどってぬけないようにすること、そのためにはとにかく糸の方向を常に一定にして扱うことで、これは自家用も、商品生産の場合もかわりません。しかしそれと同時に紡織工程において原料となる青苧は当初より良質の東北産を用いたこと（慶長期にはこれを証する記録がみられる）、また京都の絹織物以外では、始めて高機を導入したこと、そのほか使用される道具の随所に商品織物として生産することを目的とした奈良晒の特色をみることができ、それら道具の工夫や糸の扱い方の工夫について他地域（越後上布など）との比較も交え実際に使われていた民具をもとに展示紹介いたします。地域の伝統織物の技法とその変遷を具体的にたどるのはなかなか難しいことですが、江戸中期の『奈良曝布古今俚諺集』には、その技法や道具について記述が、また『南都布さらし乃記』（前田家文書）に挿絵があり参考になります。

麻布は織ったままの状態を生布といい淡茶色ですが、晒し工程を経ることによって美しい白布となります。晒の精度で次にほどこされる染色の冴えにも違いがあるので重要な工程です。晒技術の独自性と水準の高さこそが奈良晒を奈良晒たらしめていたといえるでしょう。

各地の上布における晒し方法は様々で、その自然風土をよくあらわしています。越後上布の雪晒し、能登上布や八重山上布は海晒しで知られています。

奈良晒の場合はまず、生平布を水に浸して糊ぬきをし、松製の白と楡（にれ）の木の杵でつき、芝生の上に広げて灰汁を注ぎ掛けては晒すことを十数日間続けます（元付）。次にこれを大釜に入れて灰汁を加えて煮ます。1時間半～2時間煮てこれを取り出し、芝生の上に広げ、乾けばまた釜で煮ることを6、7度繰り返

返します（釜入れ）。釜入れが済んだ布を木臼でつきます。2回は灰汁の上澄みを注いで行い、日干しし、3回目は清水に浸して搗き、これを張干しにかけて干したといひます（『奈良曝布古今俚諺集』『工務局月報』32号農商務省発行 明治正17年など）。

また、『呉服類名物目録』（寛延元年<sup>1748</sup>）では、①はじめ水で糊を洗い落として日に干し、②一番灰汁というのにつけ、③一兩日浸けおいてそれを釜に入れて灰汁でたく、④一日たいて、その夜は釜に浸け置き、⑤川辺で臼に入れて搗く。水で2、3度あらい、なんべんもついでには日に干し、⑥かわいたら灰汁を何度も掛ける、（番号筆者）と書かれています。残念ながら、このような晒方法は現在は廃絶し、全く伝わっていません。灰汁晒しではありませんが、伊勢神宮の御料布を承っている坂西家で行われている晒し作業の中にわずかにかつての様子を偲ぶことができます。

今回の展示では、染色史研究者の宮崎明子氏のご協力により『呉服類名物目録』に基づく灰汁晒しのサンプルを製作していただくことができました。奈良晒の晒し技術は、奈良晒の技術の核心部分であるにもかかわらず、詳細についてはまだまだ不明な点も多く、今後さらに調査研究を進めてゆく必要があります。

### 4. 伝統を受け継ぐ人々

奈良晒は維新によって幕府が倒れ、武士という最大の顧客層を失うことにより決定的ともいえる打撃を蒙りましたが明治～現在まで奈良晒の伝統を受け継ぎこれを守ってきた人々がいます。奈良市元林院町で文政元年<sup>1818</sup>に創業し、奈良市東部、月ヶ瀬村等に工場を設け生産、技術普及に努力した中川政七商店、伊勢神宮に納める御料麻布を承る坂西商店、奈良市田原の地で伝統的な奈良晒の製法を受け伝える岡井商店、昭和54年に奈良晒の紡織技術が県の無形文化財に指定されたことを契機に同58年から始められた月ヶ瀬村奈良晒伝承教室等の活動を、明治・大正期の麻織物（石打縞ほか）とともに紹介いたします。

奈良晒は、今また岐路をむかえています。紡織技術の指定を受けた当時、その伝承者は100名ほどであったといひますが（『奈良さらし』月ヶ瀬村教育委員会発行 昭和59年）15年の年月の間に20名を下回る現状となっています。今回の特別展によって、私達のこの誇るべき伝統織物に関心を向けていただく契機となることを併せて願っています。

# 再び、盂蘭盆における客棚習俗について（その一）

奥野義雄

## ●はじめに

数年前本誌（通巻60号）で、盂蘭盆＝お盆に客棚を祀る習俗について紹介したことがある。

その後、折に触れて調査をおこなうことによって、盂蘭盆のときに、自家（自分の家）の新仏を祀る以外に血縁の濃い親類の新仏も祀るいわゆる「客棚」習俗がいくつか集まってきた。

以前の紹介で示した課題に関連するが、奈良県でも地域的な広がりがあり、今回の調査から明示できるようである。ただ、前稿では、奈良、和歌山などの一地域のみではなく、近畿圏内へ広がりをみせていくだろうと想定した。しかし、大阪、京都、滋賀などの広範囲にわたる調査をおこなっていないので、現段階では想定域をでない。

また、客棚を祀る習俗がない地域で、この習俗と違った習俗の存在を確認し得た。違いをみせる習俗については、調査事例の客棚を祀る習俗と対比しながら提示したいと考えている。

ここでは、まず盂蘭盆習俗の調査にともなって見出すことができたいくつかの客棚を祀る習俗の事例を紹介することからはじめたい。

## □客棚を祀る習俗の事例

ここで紹介する客棚を祀る習俗は、紙面の都合で三例にとどめる。

### 事例1、山添村北野のタナ

この村のお盆は、8月13日から14日までで、15日には盆行事はおこなわない。13日の夕刻、ムギワラをたばねたものを細竹の先に刺したタイマツを道のそばの入口で焚いて、ご先祖さんを迎える。仏壇に迎え入れると、「オチツキダンゴ」を供える。

14日は、朝、昼、夕食の食べ物を供えて、夜に迎えタイマツと同じものを焚いてご先祖さん（オショライさん？）を送る。

また、かつてはこの日、墓参りをして、その後家族全員でソウメンをいただいたという。

お盆の時期に、新盆を迎える家では、同じように新盆を迎える親類の新仏をいっしょにタナ（アラタナと呼んでいたかは明らかではない）に祀る。このタナは、「客棚」とか、「貰いボトケ」とかと呼んだかは不明である。

これ以外にお盆の習俗として、オチャトウ（お茶湯）を供えること、新盆にトウロウ（岐阜チョウチンも含む）を供えること、ガキダナを祀ることなどがあるが、ここではその詳細は割愛する（以下に紹介する事例でも、これらの習俗の詳細は、割愛する）。

### 事例2、山添村峯寺のタナ

この村のお盆は、8月13日から15日までで、13日の夕方にご先祖さん＝オショライさんを迎え、15日の早朝に片付けて、夜に送るといふ。

8月13日の夕方には、迎えタイマツを三本焚いてオショライさんを迎える。道に面した家への出入口のそばでイナワラをたばねて細竹に挟んだタイマツを順番に焚き、その後仏壇の前に設けた台（座卓）に先祖の位牌を並べたところへオショライさんを導く。台の上にある灯明（ロウソク）に火をともし、線香を焚いてオショウライさんを祀る。そして、オチツキダンゴを供える。翌日14日は一日、朝・昼・夕食を供える。そして、夜にはオモチ（アンモチを含む）やソバをつくる。15日の早朝に送るときの供え物であるという。同日の夜には、迎えタイマツと同じものを同じ場所で焚いて送る（15日の早朝にオショライさんの位牌や祭具、そして供え物などを片付けて、この時に実際、オショライさんを送ったことになるのに、あらためて夜にタイマツを焚いて送る習慣になっていることへの疑問があるようである）。

このお盆の時期に新盆を迎える新仏に対してタナをつくって、軒縁に安置して、13日から15日までオショライさんと同じように祀る。タナは、青竹で四柱をつくり、その三方（三壁面）にヒバを張りつける。内部には新仏の位牌（経木状のもの）、灯明、線香、そして供え物などが置ける棚が設けられている。

このタナに、自家の新仏の位牌のほかに別の位牌が祀られていることもある。この別の位牌は、自家と最も血縁深い親類の家＝他家の新仏であり、他家でも同じように自家の新仏をタナに祀ってくれるという（新仏へのトウロウ進供もあった。また、いまもガキダナを祀る習俗があるが、温かいオチャトウを供える習俗は簡略されてきている）。

### 事例3、天理市山田のタナ

例年どおり8月13日から15日までがお盆の時期であるが、8月7日にお盆に必要なものを準備して、墓参りをする（七日盆という）。

8月13日の夕刻に、ご先祖さん＝オショライさんを迎えるために、タイマツを焚く。この迎えタイマツは、スギ葉をたばねたものを青竹の先に刺したもので2本つくる。家によってはムギワラあるいはイナワラをたばねたものを青竹の先に刺したタイマツを焚く。送りタイマツも同じものである。

迎えタイマツを焚いて、オショライさんを迎え入れてから、供物を供え、灯明（ロウソク）に火をともし、線香を焚く。

翌日14日は、オショライさんに朝・昼・夕食を供える。そして夜には、夜食を供える。家によって供える食べ物は異なるが、朝食にはボタモチ、昼食には七色の煮物やソウメン、夕食には白米や煮物などを供えるという。

供える食べ物は、新盆の新仏に対しても同じであり、軒縁につくられたタナに供えられる。新仏のタナは、青竹の四柱の三方をヒバで囲んで、一方のみ開口にして、棚状のものを設けたものである。タナには、新仏の位牌（経木状のもの）、供え物、灯明、線香などが置かれている。

このタナに、新盆を迎えた他家（血縁の濃い親類）の新仏の位牌を祀ることがある。同じお盆の時期に新盆を迎えた自

家と他家の新仏の位牌が祀られることがある。

15日の夕方には、オショライさんと新仏を墓まで送っていく。送っていく以前にタイマツを家のそばの道端で二本焚く（かつては、新仏へのトウロウ進供の習俗があった。また、冷えたお茶を温かいお茶に取り替えるいわゆるオチャトウの習俗も簡略になってきているという）。

### 事例4、都祁村友田のソトダナ

友田の村のお盆は、8月13日から15日までで、13日の夕刻にご先祖の精霊を迎える。このとき、家のそばで迎えタイマツを焚いて、精霊を家に迎え入れる。迎えてから、この夜はオチャトウを供えて、しばらくしてから「お風呂に入って下さい」といって、先祖の精霊を風呂場に案内するという珍しい習俗がある。

「ご先祖は遠いところから旅をして、わが家に戻って来られたので、お風呂に入って、今夜はゆっくり休んでいただくという思いがあったのかもしれない」という。

翌日14日は、朝、昼、夜、そして夜食を供える。そして、15日の午前中（朝方）に先祖の位牌や祭具などを片付ける。この日の夕方に先祖の精霊をタイマツで送る。

初盆の家では、お盆の三が日の間、軒縁にタナを造って新仏を祀る。タナは、青竹を四柱にして三方をヒバで覆い、内部に棚を造って、新仏を安置するようになっている。このタナはソトダナと呼ぶ。ソトダナには、自家の新仏以外に、他家（血縁者）の新仏も祀るという。他家の新仏を祀る習俗に対して、とくに「ソトダナ」という以外、呼び名はないようである。

客棚を祀る習俗の調査例を四つ紹介したが、これらの地域は、以前紹介した奈良市域と都祁村域以外のものであり、奈良県内でも調査が広範囲になれば、地域的広がりが現れてくると考えている。

ここで紹介しきれなかった客棚を祀る習俗の調査事例は、客棚習俗のない地域＝村落でおこなわれている習俗と対比させながら後述していくことにする。ただ、お盆行事の習俗を省略し、客棚習俗のみを提示することをあらかじめことわっておきたい。〔続く〕

## 新公開用映像資料「和傘づくり」「提灯づくり」「葛粉づくり」の紹介

大宮守人

### ●はじめに

平成11年度で3本を新たに編集し、ビデオ学習室の「6-6番席」で公開しております。

資料映像の収録はビデオ学習室のオープン(s.60/1)とともに始まりました。有形の民俗資料である民具には、それぞれの使われ方という無形の部分が付随しており、その解説は文字を通しては大変不自由であり、音声映像による伝達が有効なためです。

当館では、収録の対象を伝統的な郷土の生活の中で受け継がれた伝承技術とし、あまり扱われることのなかった、手仕事や生活技術を収録してきました。伝承者が高齢なため当面収録に専念することとし、平成9年度より公開用の映像編集に着手しました。

収録と編集にあたっては、作業の音などできる限り生かして臨場感の再現にも努めております。こうした手仕事の観察をとおして、様々な視点や立場で再発見の素材となればと考えています。新番組は今年度の3本とあわせて6本をビデオ学習室の6-5と6-6番席で常時検索利用できます。



紙張りは女性の分担であった



中央部分を仕上げる準備

なお、その他の番組リストについては、ビデオ学習室の休憩コーナーの他、当館の常設展図録（ロビー情報コーナー）にも掲載していますのでご利用ください。

### ●和傘づくり

竹や和紙などの、身近な素材の良さを生かして作られてきた和傘は伝統的な雨具のひとつです。昭和20年代にはまだ県内にも70軒近くあったという傘屋も、

今ではただ一軒となってしまいました。

山田さん（吉野町宮滝）の仕事ぶりをとおして、傘作りの伝承技術にふれることができます。竹、和紙、糊などの天然素材を使っての物作りの中で培われた技法には、様々な勘所（留意点）があり、それが手間となって現代においてはコスト高となっているのは否めませんが、環境負荷の非常に少ない素材活用の典型として様々な物作りのヒントになると思われます。

（約20分、協力 山田傘提灯店）

### ●<sup>ちょうちん</sup>提灯づくり

提灯は伝統的な照明用具のひとつです。

その大きな特色は、折り畳みのできる構造にあり、携帯や収納に大変便利です。

祭礼や儀式の調度として、また所属を表す紋所など様々な社会生活上の機能を持つ、提灯の今日的な使われ方にも興味深いものがあります。提灯の柔軟な構造は、竹や和紙など

身近な素材の特色を生かす職人の手業によって生み出されます。

炎の伴う、今の暮らしからみれば不便な明かりしか使えなかった時代に、暮らしの中で発達した、ユニークな照明用具づくりをとおして、物作りにかかわる新たな発見の機会ともなればと思います。

（約20分、協力 山田傘提灯店）



型に竹枠を巻き、石州半紙を張る



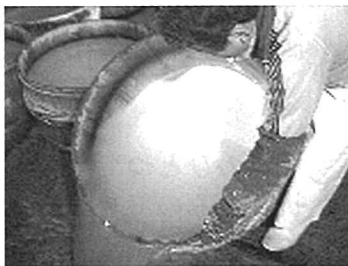
しるし書き



葛粉づくり



葛根を叩きつぶす



昔は桶で沈殿させた

### ●葛粉づくり

吉野葛は、本葛とも呼ばれる葛の根からとれる上質の澱粉です。

葛は、山野に自生する豆科の多年草つる草で、澱粉をたっぷり貯えた冬場にその根を掘り出し、叩き潰してろ過し沈殿させてつくられます。今日では、葛湯や和菓子の材料として親しまれる葛粉も、山里の厳しい暮らしの中で育まれた古くからの保存食のひとつであり食料自給の技術でした。

食品としての葛の良さを生かし様々な非常用パッケージへの導入等、応用も考えられるかと思います。

民俗博物館の収集する諸資料は、伝統的な生活の知恵からの再発見リソースとして、省エネと低環境負荷への配慮の時代に貢献できるものといえましょう。

(約17分、協力 井上天極堂、森野吉野葛本舗)

### ビデオ学習室の席配置と番組内容

※6の席では、テーブル方式により比較的最長い番組が見られます。この席の番組は時々に変えてありますので各席のリストを選んでください。

紹介の新番組は6-6番席にあります

席の番号	おまかな内容
1	祭礼年中行事Ⅰ(冬のまつり・春のまつり) ○Ⅰ(初春のまつり) 計30番組
2	○Ⅱ(夏のまつり) ○Ⅲ(秋のまつり) 計34番組
3	民俗芸能Ⅰ(神楽・踊目立・田楽) ○Ⅰ(風流・能・狂言・人形浄瑠璃) 計30番組
4	生産生業(山のくらし、里のくらしの伝承技術) 民間伝承(くらしのなかの豊かな祈りの習慣) 計38番組
5	大和の民家・大和の街道他 ・祭礼年中行事 計32番組

休憩コーナーに番組リストがあります

### 平成12年度特別展

#### 奈良晒—近世南都を支えた布—

平成12年7月29日(土)～9月24日(日)

近世初期より麻織物の第一級品として知られ、南都随一の産業といわれた奈良晒。本展覧会では、江戸時代の奈良晒布の遺品をはじめ、豊富な文書資料、紡織関係の民具などを通して、奈良晒の歴史、紡織から晒しに至るまでの工程と技法などについて、紹介いたします。

#### ■特別講演会「江戸時代の奈良晒」

平成12年9月17日(日) 午後1時30分～  
奈良教育大学名誉教授 木村 博一氏  
定員60名 往復はがきで申込み(8/17～8/31必着)

#### ■体験学習「麻糸をつくろう」

平成12年8月6日(日) 午前10時～  
帝塚山大学短期大学部講師 澤田 絹子氏  
(協力：帝塚山大学短期大学部織物研究室)  
定員30名 往復はがきで申込み(7/11～7/25必着)

#### ■ビデオ上映会

平成12年7月29日/8月6日/8月20日  
9月3日/9月9日 午後1時30分～

#### ■列品解説

平成12年7月29日(土)/9月9日(土) 午後2時～

## 奈良県立民俗博物館

観覧料：大人200(150)円、大・高生150(100)円、  
中・小生70(50)円 ( )は20名以上の団体割引料金  
開館時間：午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)  
休館日：毎週月曜日

### 開館25周年展

くらしの風景—郷土の民俗25年—

平成12年10月7日(土)～平成13年3月4日(日)

民俗博物館開館から25年、20世紀から21世紀への大きな節目でもある。この機会に伝統あるふるさと奈良の生活文化の記録であり、貴重な時代の証言者である館蔵の写真資料を展示公開し、当館の活動の軌跡を辿りつつ、新たな未来への一歩とする。

### 普及講座

#### 教材研究

—民俗資料から郷土をいかに教えるか—

民俗博物館の展示資料・民俗公園の民家、また、周辺の大和郡山市旧矢田村のフィールドに残る民俗資料から、人間と自然との長いつきあいから生み出された文化から学ぼう。

日時 平成12年8月23日(水) 午前10時～午後4時  
募集人数 30名(一人一枚往復はがきにて申し込み)  
対象 小中高校教諭・生涯学習及び民俗学に関心のある人

大和郡山市矢田町545番地 TEL0743-53-3171

近鉄郡山駅 → 奈良交通バスターミナル①のりば → 矢田東山下車  
JR郡山駅 → 徒歩約7分  
無料駐車場(乗用車118台、バス18台、身障者用3台)